

『源氏物語』はなぜ千年を超えて読み継がれてきたのだろうか？

三上 晴夫

初めに 源氏供養のこと

第一部 作家の顔

序章 【螢巻】の物語論を読む

第一章 【紫式部日記】について

- ① 「源氏の物語」 成立事情
- ② 「品定め」と「紫式部集」
- ③ 《年くれてわが世ふけゆく風の音に
心のうちのすさまじきかな》

補 在野学のヒロイン 高群逸枝のこと 【母系制の研究】 【招婿婚の研究】

第二部 物語表現の諸相

第一章 【複数光源による世界照射。その光と影の揺らぎと相互浸透】

- ① 敬語表現と語りの構造
- ② 『ぼくは紫上』 『わたしは朧月夜』 ……主語が？
- ③ 和歌表現の複線構造

第二章 「ものまざれ」——王権論はどのくらい有効か

第三章 表現としての「物の怪」

第四章 物語の閉じ方

- ① 遅延、白紙、突然の中断 —— 叙述の時間について
- ② 宇治は彼岸性の喻足り得ているか？
- ③ 凡夫の発見 —— 法然と式子内親王 および定家のこと

結語

作家は成熟する

春の夜の夢のうきはしとだえして嶺に別るるよこぐものそら 定家

初めに 源氏供養のこと

王朝末期から中世にかけ、紫式部は「源氏物語」（以下、「源語」と表記することがあります。）のようなるくでもない、濫りがましい物語を世に広め、世人を迷妄に導いたゆえ、因果応報、地獄に堕ちたという伝承が広く流布しました。所謂【紫式部墮獄説】です。後に【紫式部日記】について触れるときにお話ししますが、実は「源語」は狂言綺語を弄した光源氏の好色物語だとの受け留め方は、「源語」成立の当初からあったのです。こうした罪障深き紫式部の苦を慰めようとするのが【源氏供養】です。能の【源氏供養】では石山寺を舞台に紫式部の霊が現われ、供養によって自身が観世音菩薩の化身であったと明かします。

申すまでもなく、「源語」は誨淫の書ではありません。もしそうなら、千年を超えて真剣に読み継がれてきたはずがないではありませんか。文藝に志す先達の多くが、「源語」を無視して自分の世界を創り出すことが出来なかつた事情が、必ずあるに違いありません。しかし、「源語」とその作者に対する無理解と偏見は、近代になつても根強く残りました。例えば、内村鑑三は己が倫理感に照らし、耳を蓋いたくなるような凄まじい雑言を「源語」の不義不倫に対して浴びせています。繰り返しますが、お門違いです。

「源氏物語」を論ずるには、非常に多岐の問題を視野に収めねばなりません。これまで世に問われた万巻の「源氏論」、ほぼ12世紀後半に始まる「源氏學」に費やされた先輩方のエネルギーを思うと、目眩を禁じ得ません。もとよりわたし如きが末座を汚すことさえ叶わぬと感じていますが、ただ一つ、今日お話しさせて頂くことを契機として、現代語訳でも、「源氏物語」を通読してみようかという仲間が一人でも増えれば、それをもって私の「源氏供養」とさせて頂きたい。そんな心算でお付き合い願いたいと思います。よろしくお願いいたします。

第一部 作家の顔

序章 【螢巻】の物語論を読む

「批評家が詩人になるという事は驚くべきことかも知れないが、一詩人が、自分のうちに一批評家を蔵しないという事は不可能である。私は詩人を、あらゆる批評家中の最上の批評家とみなす。」

ボオドレイルはその「ワグネル論」に書き付けました。紫式部のことを考えると、わたしはいつもこの一節を思い出します。

概要にも簡単にデッサンしましたが、紫式部は大変論理的に物事を考えられるひとです。その基礎となる教養、素養が申し分なかったことは言うまでもありません。しかも、その論理的思考回路は初歩的形式論理のような理路整然とは違って、大変陰影に富んだ、

複雑なものです。丸谷才一が、「Aと考えると、必ず同時に反Aが頭に浮かぶ人だ」と評しているのは、そうした意味合いと思います。

知的な好奇心を持って余したわけでもないのですが、彼女は、物語中にここに取り上げる【螢巻】の物語論を始め、教育論、絵画論、音楽論………評論的言辞を惜しげもなく披露しています。それは飽く迄物語構成上の一部と考えるべきで、そのまま彼女自身の批評の表明と考えるべきでないとの意見もあります。やはり物語や絵画や音楽について常日頃考えていることの一端が、そこに含まれているとは言えるでしょう。その意味でこの「物語論」の奥行きは、取り分け興味深いものです。本居宣長も、【紫文要領】【玉の小櫛】で、本格的に「もののはれ論」を展開するに当り、直前で、この物語論について一文一文を丁寧検討し、読み解いています。

本文に入る前に、まず「螢巻」について簡単に触れておきます。玉蔓とはどんな姫君か分って頂くことが、同時に「源氏物語」54帖全体の構成をざっと俯瞰することになるからです。

即ち、梗概に「主人公光源氏（光君）50数年の生涯が、時の帝の最愛の皇子として生まれながら母更衣の身分ゆえ臣籍降下して源氏となり、しかし宮廷社会の寵児として奔放な快樂的關係をまさに織物（テクスト）として紡ぎ出しながら、そのテクストの背後に「王権への侵犯」＝父帝の中宮藤壺への犯し、不義の子の誕生（後の冷泉帝）の冥く甘美な宿命を潜め、貴種流離としての須磨（畿外）流謫を経て、冷泉帝即位後、その実の父親として太上天皇に準ぜられ、栄華の頂点を極めることになる「藤裏葉の巻」までの第一部………（以下略）」とある、第一部をもう少し詳しく見てゆくことになりま

す。キーワードは【紫上系の物語・玉蔓系の物語】です。その説明の後、当該部分の本文を読んでみようと思えますが、第一部（前半）では現代語訳（原則、谷崎訳………「日記」は宮崎莊平訳）を使います。第二部（後半）で言語表現そのものに踏み込んだ時に、原文を読んで頂きます。それでは始めましょう。

長雨が例年よりもひどくつづいて、晴れる折もない所在なさに、おん方々の御殿では絵物語などの遊びをして明かし暮らされます。明石のおん方はそんなことをも趣深くお仕立てになって、姫君のおんもとへお贈りになります。西の対では、ましてお初めてのことでですから、明け暮れ書いたり読んだりして、精を出していらつしやいます。その道に心得のある若い女房たちが大勢いまして、さまざまに珍しい人の身の上などを、嘘やら本当やら分らないながら言い集めるのでしたが、そういう中にも、御自分のような境涯の者はいないものだということがお分りになるのです。住吉物語の姫君は、その当時はいうまでもないとして、今の世までも格別な人気があるらしいのですが、主計頭（かずえのかみ）という男のためにはどんなにはらはらしたことであろうなどと、あの大夫の監（た

いふのげん)の恐ろしさを思い出されて、

我が身に引き比べてごらんになります。殿はこちらにもあちらにも絵物語が取り散らかっていますのが、おん眼につきますので、「まあ面倒な。女というものはうるさがりもしないで、人に欺されるように生まれついているのですね。たくさんな絵物語の中でもほんとうの話はいたって少いでしょくに、そうと知りつつこういう埒もないことを興がったり、真に受けたりなさって、蒸し暑い五月雨時に、髪が乱れるのも気がつかずに書いていらっしやるんですね」と、お笑いになるのですが、でもまた、「こういう昔物語でも見るのでなければ、全くほかには紛らしようのないこのつれづれを、慰める術もありますまいね。それに作り話の中にも、なるほどさもあるうという風に、あはれを見せて、もつともらしく書きつづけてあるのは、根もないことだと知りながらも、わけもなく心が動くもので、可愛らしい姫君などが憂いに沈んでいるのを見ると、ついその味方をしてしまいます。またこのような馬鹿らしいことかと思ひ読んで行くうちに、ものものしい書き方に眼を眩まされて、後で静かに考えると腹の立つようなことなのが、一寸見には飛び抜けて面白いというようなものもあるでしょう。近頃幼い姫君が女房などにとときどき読ますのを聞いていますと、随分世の中には話上手がいるものですね。大方こんな物語は、嘘を巧くつき馴れている人の口から出るのだと思いますが、それでもないのでしょうかしら。」と仰せになりますと、「ほんに、嘘をつき馴れていらっしやるお方は、いろいろとそういう風にお取りになるでございましょう。わたくしなどは一途に本当のことと思うばかりでございませう」と仰せになって、硯をお片寄せになりますので、「これは無風流な悪口を言ってしまった。いや、ほんとうは、神代からあった出来事を記しておいたものなのでしょう。日本紀などはただ片端を述べているので、実はこれらの物語にこそ、詳しいことが道理正しく書いてあるのでしようね」と、お笑いになります。

▼最後の部分、原文は

「「ちなくも聞こえおとしてけるかな。神代より世にあることを、記し置きけるななり。日本紀などは、ただかたそぼぞかし。これらにこそ道々しく委しき」とはあらめ」とて、笑い給ふ。

以下断りない場合は、池田龜鑑校註 日本古典全書版

因みに、与謝野訳は

「無風流に 小説の悪口を言ってしまったね。神代以来この世であったことが、日本紀などはその一部に過ぎなくて、小説の方に正確な歴史が残っているのでしょう」

と源氏は言うのであった。

普通は紫式部の物語論としてここまで引用される。議論は今暫く続き、このシーンは次のように閉じられる。思うところあり、引用を続ける。

「ところでそういう昔物語の中に、私のような馬鹿正直な痴者のことを書いたものがあるでしょうか。ひどく餘所餘所しくしていらつしやる話の中の姫君でも、そこなお方のようにそつけなく、空惚けておいでなのはありますまいに。ぜひこのことを類稀なる物語にして世に伝えたいものですね」と、寄つていらつしやつて仰せになりますと、お顔を襟に引き入れて、「そうでなくても、かような珍しいことが世間話にならないでおりましようか」と仰せになりますので、「珍しいとお思いになるのでしようか。全くまたとないおあしらいのような気がしますが」と凭り添つていらつしやいますのが、たいそう打ち解けた御様子なのです。

「思ひあまり昔のあとをたづぬれど

親にそむける子ぞたぐひなき

不孝ということは、佛の道でも固く戒めていますのに」と仰せになるのですけれども、お顔もお上げになりませんので、お髪(ぐし)を撫でて上げながらいたくお恨みになりますので、ようようのことで、

ふるきあとを尋ぬれどげになかりけり

この世にかかる親のこころは

と申されますのに、さすがに気恥ずかしくおなりなされて、そうもお取り乱しにはなりません。こんな風なおん有様でしまいににはどのようになられますでしょう。

(以上、この項終り)

第一章 【紫式部日記】について

紫式部は「源語」のほかに、【紫式部日記】と【紫式部集】を後世に残してくれました。文藝作品である「源語」だけでなく、作家の顔を生々しく覗き見ることが出来る日記と歌集を折に触れ繙けるのは、「源語」をより深く理解、味読するために天が計らってくれた僥倖とさえ思えます。

「紫式部日記」は、一条天皇の中宮彰子の敦成親王出産をめぐる、宮仕え生活の記録、

寛弘五年（1008）秋から寛弘七年（1010）までの回想記です。親王は彰子所生の最初の皇子、道長にとつて初孫になります。のちの後一条天皇であり、道長の権勢、栄華を保証してくれる皇子誕生でした。出産は里（実家）に下がって行われますから、舞台は御堂関白家の絢爛たる土御門殿。皇子誕生に伴う祝儀や賀宴、即ち産養（うぶやしなひ）、行幸、五十日（いか）の祝い、彰子の参内と盛儀の模様が描写されています。この記録が赤染衛門作とされる「栄花物語」（歴史物語）に援用されていることは広く知られるところです。

しかし一方、栄華の絶頂を迎えようとする主家の慶事の背後で、宮仕えの華麗な日常にどうしても馴染めぬ、深い孤立、違和のパトスを抱え込まざるを得なかった苦悩が、正直に吐露されているのも、この日記の反面です。他者に対する辛辣な批評（品定め）と鬱々たる内面の告白からなる、記録部分と文体が違っているために、「消息文」と考えられてきた部分に、それは顕著です。深い内省の声は率直であり、真摯であり、或いは「源氏物語」執筆の表現欲求の淵源を、そこに重ねて見たくもなります。少なくとも、作家たる資質の芯棒が奈辺に存するかは、考えさせられるでしょう。ここでは三パートに分けて「紫式部日記」を読んでもみます。

① 「源氏の物語」 成立事情

紫式部の生没年は不詳ですが、漢籍に通じた学者、漢詩人、歌人でもあった下級貴族、越前（後）守藤原為時を父とし、惟規（のぶのり）という兄弟がいます。二十四くらいで年の離れた山城守藤原宣孝（のぶたか）と結婚、賢子（大式三位）を儲けますが、宣孝とは数年で死別したようです。それなりに宣孝を愛し、頼りに思っていた様子は、歌集【紫式部集】からも窺い知れます。中宮彰子の女房兼家庭教師としての出仕は、寛弘二年ころ、寡婦になってからと考えられ、寛弘八年まで続いたようですから、その間に「源氏物語」のある部分は完成され、世間に（と言っても、宮廷の極めて狭い範囲でしようが）流布され始め、評判であった事情が、この日記からも推測されているわけです。

★ 五十日の祝いの宴席で

左衛門督（かみ）が、

「おそれ入りますが、このあたりに若紫はおられませんか。」

と、（御几帳の）中の様子をおさぐりになる。光源氏に似ていそうな人もお見えにならないのに、ましてあの紫上が どうしていらっしやるはずがあるうかと、（心に思つて）聞き流していた。

（左衛門督 藤原公任、四納言の一、和漢朗詠集を編む）

★ 物語の本の作成作業

(中宮さま)が宮中へ還御なさるはずのことも近づいたけれども、女房たちは(行事が)次から次へと続いて気も休まらないのに、中宮さまには、御冊子(みそうし)をお作りになられるというので、(ご指示を受けた私は)夜が明けると、すぐに(中宮さまの)御前に伺候申し上げて、色とりどりの紙を選び整えて、物語の(書写する)もとの本を添えては、あちこちに(依頼の)手紙を書いて配る。その一方では(書写されてきたものを)綴じ集めて整理するのを仕事として毎日を過ごす。(殿は)

「いったいどういう子持ちが、この寒い時分に、こんなことをなさるのか。」と、申し上げなさるものの、上等の薄様(うすよう)の紙や筆、墨などを持参なさっては、お硯までも持って来られたので、(中宮さまがその硯を私に)くださったところ、(殿は)大袈裟に惜しがって、

「奥まったところにお仕えして、こんな仕事を始めるとは。」
と、(私を)責めなさる。そう言いながらも、(殿は私に)上等な墨挟みや墨、筆などをくださった。

(自分の)局に、物語の本などを(里へ)取りにやって(持って来たのを)隠しておいたところ、(私が)中宮さまの御前にいる間に、(殿が)こっそりお出でになって、お探しになって、全部内侍の督さまに差し上げてしまわれた。まずまずという程度に書き直しておいた本は、みな紛失してしまったり、(手直ししてない本が内侍の督さまに渡ってしまい)きっとよくない評判を取ることになってしまったことでありましょう。

(内侍の督 道長の二女妍子)

★ 日本紀の局

帝が、『源氏物語』を人にお読ませになつてはお聞きになつていたとき、「この人(作者紫式部)は、きっと日本紀を読んでいるにちがいない。ずいぶんと学識があるようだ。」

と、仰せになられたのを(聞きかじった左衛門の内侍は)、あて推量して、「ひどく学識を鼻にかけているんですって。」

と、殿上人などに言いふらして、「日本紀の御局」と(いうあだ名を私に)つけたのでしたが、まことに笑止なことです。自分の実家の侍女たちの前でさえ、おし隠しておりますのに、(どうして)そのような宮中などで学識をひけらかした

りするでしょうか。

私のところの式部丞（惟規）が、まだ少年で漢籍を読んできました時、（私はそばで）聞き習っていて、その人は理解に手間どったり、すぐ忘れてしまうところをも、（私は）不思議なほど習得がはやかったものですから、漢籍の学問に熱心であった父は、

「残念なことだ。（この娘が）男子（おのこ）でなかったことが、（私の）不幸というものだ。」

と言って、いつも嘆いておられました。

……………中略……………

中宮さまが御前で（私に）、『白氏文集』のあちこちをお読ませになったりして、（漢詩文の）その方面のことをお知りになりたげなご意向でありましたので、たいそうこっそりと、女房たちが伺候していない間隙を見はからっては、一昨年の夏頃から、「楽府（がふ）」という書物二巻を、整わないながらもお教え申し上げておりますが、隠しています。

★ 源氏の物語、御前にあるを

『源氏の物語』が（中宮さまの）御前にあるのを、殿がご覧になって、いつものように、とりとめもない冗談などを言い出されたついでに、梅の実の下に敷かれてある紙にお書きになる。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ

（その歌を私に）くださったので、

「人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとは口ならしけん
心外なことです。」と申上げる。

渡殿（の局）に休んだ夜、（局の）戸をたたく人がいて（その音を）聞いたけれど、恐ろしさのあまり、何の応答もせずに夜を明かした、その翌朝に（殿から）、

夜もがら水鶏（くひな）よりけになくなくぞ真木の戸口にたたきわびつる

返しの歌

ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし

② 「品定め」と「紫式部集」

紫式部は月旦評に長けていました。日記の消息文と言われる部分もまず同僚である女房たちの【品定め】から始まります。「帚木巻」の【雨夜の品定め】を思い起こしますし、同時に、その狷介孤高な知性の発露は、【紫式部集】の詠歌の多くが、ともすれば生硬で潤いに欠け、宛ら頭の良い女子学生の作のように小さくまとまった印象を与えるのに、照応しているようでもあります。

乱暴を承知で申せば、百人一首中

『めぐりあひて見しやそれともわかぬ間に雲がくれにし夜半の月かな』
が、同じく娘大式三位の

『有馬山猪名の笹原風吹けばいでそよ人を忘れやはする』

の、精妙繊細な（爽快な）リズムに遠く及ばないのは明らかです。以上を前置きにはここでは、【品定め】のほんの一部ですが、有名な和泉式部評と、辛辣極まりない清少納言批判を取り上げておきます。

「和泉式部という人は、実に趣深い（手紙を）やりとりしたものです。しかし、和泉式部には感心しない面があるものの、気軽に手紙をすらすらと書いた時に、その筋の才能を発揮する人で、ちよつとした表現にも色つやが見えるようです。和歌は、とても趣きがあります。古歌の知識や詠作の理論などからすると、本格的な歌の詠みぶりとは言えないでしょうが、口にまかせて詠んだ歌などに、必ず魅力ある一点が、目にとまるものとして詠み込まれています。それでありながら、他人の詠んだ歌などを、非難したり批評したりするところからみると、さあそれほどには分かっておりますまい、口について自然に歌が詠み出されるのであろうと、思われるような詠風なのです。こちらが恥ずかしさを感じるほどのすぐれた歌人とは思われません。」

清少納言は、まことに得意顔もはなはだしい人です。あれほど賢ぶって、漢字を書き散らしていますが、その程度もよく見ると、まだまだ不足な点がたくさんあります。このように、人に格別すぐれようとばかり思っている人は、やがてきつと見劣りがし、将来悪くなつてばかりいくものですから、いつも思わせぶりに風流ぶっている人は、ひどく不風流つまらない時でも、しみじみ感動しているように振舞い、ちよつとした情趣も見逃すまいとしているうちに、自然と、感心しない軽薄な態度にもなるに違いありません。そのように実意のない態度が身についてしまった人の行く末が、どうしてよいはずがありません。」

③ 年くれてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな

★ まず、タイトルの《年くれて……》を含む述懐から。

師走の二十九日にまゐる。はじめてまゐりしも今宵のことぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたち馴れにけるも、うとましの身のほどやおぼゆ。

夜いたう更けにけり。御物忌におはしましければ、御前にもまゐらず、心細くてうちふしたるに、前なる人々の、

「内裏(うち)わたりはなほけはひ異なりけり。里にては、今は寝なましものを。さもいざとき沓のしげさかな。」

と、色めかしく言ひひたるを聞く。

年くれてわが世ふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかなとぞ独りごたれし。

★ 求道への思いと逡巡

いかに、今は言忌(こといみ)しはべらじ。人、と言ふともかく言ふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひはべらん。世のいとほしきことは、すべてつゆばかり心もとまらずなりにてはべれば、聖にならむに、懈怠(けだい)すべうもはべらず。ただひたみに背きても、雲に乗らぬほどのたゆたふべきやうなんはべるべかなる。それに、やすらひはべるなり。としもはた、よきほどになりもてまかる。いたうこれより老いほれて、はた目暗うて経読まず、心もいとどたゆさまさはべらんものを、心深き人まねのやうにはべれど、今はただ、かかるかたのことをぞ思ひたまふる。それ、罪深き人は、またかならずしもかなひはべらじ。前(さき)の世知らるることのみ多うはべれば、よろずにつけてぞ悲しくはべる。

補 在野学のヒロイン 高群逸枝のこと 【母系制の研究】 【招婿婚の研究】

キーワード

婿入り婚 招婿婚 通い婚 後朝の文 三日夜の餅 露頭(ところあらわし)

妻方居住婚 夫方居住婚・北の方 一夫多妻制 一夫一妻多妾制 召人

母系制 家司 二条院、六条院の相続関係

高群 逸枝 (1894~1964)

平塚らいてう 橋本憲三

婦人戦線

女性史研究所

第二部 物語表現の諸相

第二部を始めるに当り……………

★ 講演概要 資料Ⅰ の補足

『いさよう月に、ゆくりなくあくがれんことを、女は思ひやすらひ、(源氏が)とかくのためふほど、(月が)にはかに雲がくれて、明け行く空いとをかし。』

この箇所、与謝野現代語訳は以下のように、さすがである。

(月夜に出れば月に誘惑されて行って帰らないことがあるということを思って、出かけるのを躊躇する夕顔に、源氏はいろいろに言って同行を勧めているうちに、月もはいつてしまって東の空の白む秋のしのめが始まっていた。)

ちなみに谷崎訳は

『山の端に入りかねてたゆとうている月影の下を、どことも知れず不意にあくがれて行くことを、女はためらっていますので、何とか彼とか口説いていらっしやる間に、にわかには月が雲に隠れて、開け放たれて行く空がたいそう美しいのです。』

おまけに Arthur Waley 訳

She was thinking with pleasure that the setting moon would light them on their way, and Genji was just saying so
when suddenly the moon disappeared behind a bank of clouds. But there was still great beauty in the dawing sky.

★ 夢の浮橋 卷末部分

【いつしかと待ちおはするに、かくたどたどしくてかへり來たれば、すさまじく、なかなかなり、と思（おぼ）すことさまさまにて、人の隠しすゑたるにやあらむ、と、わが御心の思ひ寄らぬ限なく、落し置き給へりしならひに、とぞ本に待るめる。】

（池田龜鑑校注）

現在多くは「本に待るめる。」なし。これを後の書入れとする。待りの語法の時代性からほぼ決着か？

「……………、とぞ。」で終わっていたと考えられる。

【与謝野訳】

大將は少年の帰りを今か今かと思つて待つていたのであつたが、こうした要領を得ないふうで帰つて來たのに失望し、その人のために待つ悲しみはかえつて深められた気がして、いろいろなこと想像されるのであつた。だれかがひそかに恋人として置いてあるのではあるまいかななどと、あのころ恨めしいあまりに輕蔑してもみた人であつたから、その習慣で自身でもよけいなことを思うとまで思われた。

【谷崎訳】

今か今かと待ちこがれておいでなされた殿は、そんなわけであつたが、帰つて來ましたので、すっかり興がさめて、なまじ使いをお出しになつたことが恨めしく、いろいろに氣をお廻しになつたりしまして、誰かがあそこに匿つてゐるのではないかななどと、御自分がかつてかの山里へ、抜け目なくお隠しになつて捨てておおきになりました経験から、そうも考えていらつしやいますとやら。

【田地訳】

大將の君は、今か今かと待ち遠しく思つておいでになつたのに、小君が、このようにわけも分らぬままに返つて來たので、すっかり氣落ちなさつて、なまじ使いなど出さなければよかつたと、とめどもない物思いに沈んでいらつしやる。あげくの果てには、もしや誰かが、あの女（ひと）を小野に匿つてゐるのではなかと、疑つてみたりもなさる。あの女を宇治の山里に密かに囲つてお置きになつた來し方に照らして、氣をまわしてお考えにもなつたとやら。

★ 草子地 古御達 のこと

帚木卷 冒頭

光源氏、名のみことぐしう、言ひ消たれ給ふ咎おほかなるに、いとゞ、かゝるすきごとどもを、末の世にも聞き伝へて、輕びたる名をや流さむと、忍び給ひけるかく

ろへごとをさへ語り伝へけむ、人のもの言ひさがなさよ。さるは、……………
(中略) ……………さしもあだめき目馴れたる、うちつけのすきくしきなどは、好ましからぬ御本性にて、稀には、あながちに引き違(たが)へ、心盡なる事を、御心に思し止むる癖なむ生憎(あやにく)にて、然るまじき御振舞もうちまじりける。

(有朋堂版)

夕顔巻 卷末

かやうのくだしき事は、あながちにかくろへ忍び給ひしもいとほしくて、皆漏しとどめたるを、など帝の御子ならむからに、見む人さへかたほならず、もの誉めがちなると、つくりごとめきてとりなす人ものし給ひければなむ、余り物言さがなき罪さりどころなく。

(同)

第二部 物語表現の諸相

第一章

【複数光源による世界照射。その光と影の揺らぎと相互浸透】

① 敬語表現と語りの構造

源氏物語の敬語法は難しい。読解のネックになっているとよく言われます。実はその難解さは一寸した思い込みに因るので、簡単なコツを掴んでしまえば、すぐ慣れてしまふという程度のもんです。日本語の敬語法には、【尊敬・謙譲・丁寧】と三種がある。そう習ってきた世代があるはずです。特にこの【謙譲】ということが誤解のもとのようなのです。

源氏(中古文)読解では、【尊敬】表現を【為し手尊敬】、【謙譲】表現を【受け手尊敬】と捉える必要があります。そして、【為し手尊敬】は、話者→為し手(動作主)への敬意を、【受け手尊敬】は、話者→受け手への敬意を表しているのです。

「母君、御子をかしづきたてまつり給ふ。」を考えて見ましょう。かしづくは大事に養育すると言うほどの意味です。

文意は

「母君は御子を大事に育て申し上げなさる。」とでもなりましょう。

かしづくという動作の為し手は母君ですから、【給ふ】は話者から母君への敬意をあらわしています。かしづくという動作の受け手（目的語）は御子ですから、【たてまつり】は話者から御子への敬意を表していることになります。断じて母君から御子ではありません。ともに敬意を表していることに留意してください。

たったこれだけの事です。しかしよく考えて見ると、事態はそれほど単純ではありません。為し手と受け手は分りましたが、では、話者って誰なんでしょうか？

「母君、御子をかしづきたてまつり給ふ。」が会話文の一部であれば、物語中のその会話の主が話者になります。

そうでなくて、地の文だったら、どうでしょう？ この物語の作者でしょうか？

源氏物語は、大雑把に言って、古御達（昔から仕える老女房たち）が、巻巻或いは場面によって、この物語を語り継いでいるという暗黙の了解のもとに成り立っています。言はば【語り手】です。その奥に作者の存在があることになりました。即ち、地の文を語るのは【語り手】ですが、時々その【語り手】が、ふと表に現われて、自身の感想や感慨を述べることがあります。その部分を地の文と区別して、【草子地】と言っています。

話題になっている登場人物相互の関係だって、身分、性差、年齢、愛憎、教養や言語環境………充分入り組んでいるはずですが、何しろ物の怪だって絡んでくる世界ですから。………加えて語り手の目、作者の視線が全体を包み込むように、優しくも、意地悪にも、見守っている。時には二つの目が重なって、読者の方が目眩を起こします。

多分この物語の敬語法は、そうした物語の表現構造、《光と影のゆらぎと相互浸透》とでも呼びたい流動的、可塑的な世界像の呈示と深く係わっているのです。紫式部がその妙味を十分に意識していたこと、実に正確に取り扱ったことは、間違いないと思います。

源氏物語は、主語が省略されたり消滅してしまっていて読み難い。そんな時、敬語に注目すると行方不明の主語特定に役立つ、と言われます。確かにそうした面もあるでしょうが、敬語法の駆使は、遙かにそれ以上のものです。原文で読むワクワク感の一部は、普通は面倒に思われる文末の敬語表現から、まるでポリフォニー（多声音楽）を聴くように、関係性の網の目の揺らぎを聞き分ける喜びと言えましょう。

② 『ぼくは紫上』『わたしは朧月夜』……主語が？

『あなたは源氏物語に登場する女君のなかで、誰が一番好きですか？』

『ぼくは紫上だ。』『わたしは朧月夜よ。』………よくある総選挙の回答の一部です。

た。

では、この文中の助詞【は】は、どんな働きをしているのでしょうか。当然主格を表しているのでしょうか？ でもそれにしては何だか変です。

大野晋・丸谷才一に、『日本語で一番大切なもの』なる対談集があります。元々は、中央公論社刊『日本語の世界』の月報に連載されたものです。昭和末年上梓され三十年が経過していますが、日本語について考えるとき、今なお充分刺激のかつ有益なコメントが幾つも見つかると思います。わたしも「已然系とは何か」を中心とする章など何度読み直したか知りません。

「主格の助詞はなかった」という章で、丸谷の『最近の国文法で、【は】や【も】が係助詞となっていると聞いてびっくりしたが……【は】が主格の助詞だと我々が漠然と思っていたのは、あれは英文法の影響なんでしょうか。』との問いに、大野は、『明治時代から後に、英文法をもとにして、大槻文彦が日本語の文法を組み立てたときに、ヨーロッパでは文を作るとき主語を必ず立てる。そこで「文には主語と述語が必要」と決めた。そこで、日本語では主語を示すのに「は」を使う、と考えたのです。ヨーロッパにあるものは日本になくは具合が悪いというわけで、無理にいろんなものをあてはめた……その最たるものが「主語」で、向こうで必ず主語を立てるから、日本語の文にも常に主語があるはずだということになった。そうすると、「われは日本人なり」という場合などを考えて、【は】は主語を表すんだというふうになったのです。これが、日本語の【は】に対する誤解の根本だったんじゃないですか。……言語には、万国共通の面がある。またそれぞれの言語が持つ表現形式の微妙な面がある。ところが、ヨーロッパのものを追いかけた時代には、日本語がヨーロッパの言語と違うんだということを、学者も文部省もはつきり認めにくいところがあった。それが文法の考え方に反映しているのでしょうか。』と答えています。

そして、ヨーロッパの言語で必ず主語を立てざるを得ない一因として、動詞の人称変化を挙げていますが（Sが確定しないと、Vの姿が定まらない）、考えて見ればそもそも、英語にせよ仏語にせよ、文は、言葉の並べ方の順序で、それぞれの単語の機能関係が決定し、有意になるわけです。日本語のように助詞と言われる単語と単語を関連付ける、機能関係を専らにする言葉は存在しない。欧米で、S-VあるいはS-IPの主観客観図式が何処までもついて回るのは、言葉の仕組みによって宿命づけられている。この問題は次のような発言にまで繋がります。

大野は時枝文法に触れ、「助詞といふものは、本質的に話題の物事や動作を操る操り方を表す言葉だ。格とは本来関係がない。」とした上で、

『私はうなぎ。』この【は】どんな機能を果たしているか、【は】の後に「どうかとい

うと」と補うと大抵は説明がつく。つまり、【は】とあれば、「どうか」とか「どう」とかという状態か」とか、何がしかの答を下に求める形式と考えれば【は】のおよその例は理解できる。』

『日本人は問題を出して相手に答えを求めるといふのを、文の基本的な形式の一つとしていたわけですね。実際には文では多くは相手に求めず自問自答しますが、主語、述語によって文が成立するという考え方は、誰がしたかということを中心にして述べることを基本とする言語形式ですが、日本語は誰がしたかを中心にして文を作ることはなかったんです。何が問題かを提示して、下に答えを要求した。それが基本だったんです。……人間関係に於いて相手を絶えず意識しているのです。』

丸谷は、『問いと答えということが大事なんです。非常に弁証法的な言語ですね。』と相槌をうっています。

どうやら、源氏物語は主語が省かれていたり、明示されなかったりして、理解しにくい………というのは臆見かも知れませんが。近代日本語に慣れた頭脳から見たら、なるほど面倒でも主語を補って上げないと文脈を辿れぬような気がし、実際岩波の古典文学大系（山岸徳平校注）の原文ですら、「こ丁寧に、「桐更は」、「帝は」、「源は」などと行間に注記され、これはこれで鬱陶しいものですが、実はすべてに主語を補って読み進める必要は本来ない、というか、むしろ日本語の特性をスポイルしてしまうだけなのではないでしょうか。そもそも日本語は、まず主語を立てて文を形成する、また相手はそれを、S—Pの世界了解の形式として受容するという認識の枠組みとは、異なる位相で成り立っていたということです。

それでは、一々主語が明示されず、くねくね、うだうだ息長く続いてゆく文を辿ってゆく読者には、一体どんな世界が見えているのでしょうか。

第一義的な主語定位によるS—Pの関係を、一つの光源から発せられる光が述語的世界の影を投影する、宛ら円錐形のようなモデルに喩えてみましょう。意識というものが言葉の力によって世界と関わりを持つ以上、その論理形式そのものが消滅してしまうのではないはずです。むしろ絶えざる光源の変位、あるいは光源の多重化によって、述語的世界が、それはこの場合まさに物語として、現実そのものではない虚に他なりません。このイメージはもとよりフィクションです。なぜならわれわれは、近代日本語の論理形式から自由になることは、容易ではないからです。しかし、源氏物語を読む栄光も希望も、そのカオスに懸かっていると考えられぬでしょうか。再び、前項の結語に還ってゆくようです。

『源氏物語を原文で読むワクワク感の一部は、まるでポリフォニー（多声音楽）を聴くように、関係性の網の目の揺らぎ、時間性を伴った和声の展開、目まぐるしい転調を、聞き分ける喜びと言えらる。』と。

③ 和歌表現の複線構造

前項で取り上げた対談で、『日本語は、誰がしたかを中心にして文を作ることはなかったんです。何が問題かを提示して、下に答えを要求した。それが基本だったんです。………』と問いと答えということが大事なんですね。』とまとめたあと、丸谷が面白い指摘をしています。少し長いがそのまま発言を引用しましょう。

「わが恋は」という歌はずいぶん多くて、私は王朝和歌というのは結局、「わが恋は」という第一句が代表的なんじゃないかと考えています。というのは、水戸高校の先生で金沢の大学に転じた窪田敏夫という方がいらしたでしょう。あの方の説に、王朝和歌の本質は、謎と答であるという説がありましてね。要するに上の句で問題を出すと、下の句でそれに答える。たとえば、「霞立ち木の芽もはるの雪降れば」と問題を出すと、それを受けて、「花なき里も花ぞ散りける」と相手が見つかる。そういう構造が王朝和歌の基本の型なんだという説なんです。一人で詠む場合にも、この謎と答による言語遊戯という構造で一首が出来ていると見るんですね。この説は非常に本質的なところをえぐった卓抜な意見だと前から思っていました。ですから、たとえば慈円の、

わが恋は松を時雨の染めかねて真葛が原に風騒ぐなり

これは「わが恋は松を時雨の染めかねて」と出し、それを相手が、といっても同一人物なわけですけれども、どう答えればいちばんうまくいくかと考えて、「真葛が原に風騒ぐなり」と答えるのがいちばんの正解だと考えた。つまり一人の人間が、謎の出し手と、答え手に分離する。分離するけれども、しかしそれが合う。その合わせる機能がいちばんうまく發揮されたときに、こういう秀歌が生まれるわけです。

ところが、王朝和歌というのは基本的にエロチックなものですから、問いとしていちばんいいのは、色事に関係した問いですね。そのなかでいちばん訴える力が強いのは、「わが恋は」を含む問でしょう。ですから窪田説と王朝和歌はエロチックなものだという考え方を結びつけば、王朝和歌は「わが恋は」で代表されることになりましたね。そのことから見ても、「は」という提題の助詞は、和歌で非常に大事なものだろうと思っ

ていたんです。

これに関連して、二点指摘しておきたいと思います。

第一は万葉集の「寄物陳思」（物に寄せて思ひを陳ぶ）。

君待つと我が恋居れば我が宿のすだれ動かし秋の風吹く

額田王

夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ

坂上郎女

万葉集の作歌法は「寄物陳思」、「正述心緒」（正に心の緒を述ぶ）「詠物」「叙景」と多様に展開されてゆきます。しかし、【心情に関わる詠】と【自然の物象に関わる詠】が互いに対応すべく、一首を【物】と【心】で有機的に構成する「寄物陳思」が万葉を貫く伝統的、中心的作歌法でした。それが以降の韻文の在り方を強く規制することになります。日本の詩は抒情詩であると言われます。しかし、考えて見れば、人間の洩らす心情（溜息）なんて多寡が知れている。「恋しい」「寂しい」「辛い」「苦しい」「恨む」「逢いたい」「忘れないで」「待つわ」「いやよ」「さよなら」……まあ、演歌と同じですね。だから情を述べること自体が、「溜息吐息」自体が問題になっているのでは実はないのです。月並な慨嘆でも、それをいかに表現するか、自然の物象と絡めて、三十一文字の宇宙をいかに創造できるかが総てなのです。

その二層構造の関係・対応の、整然と整った堅固さや、思わぬ軋みの不協和音や、故意にちよとずらして見せる機知や、歌人はそこに全精力を傾注する。

自然はだから常に表現として、象徴としての内部であることを要請されています。一見、詠歌のレトリックと見られがちな、枕詞とか、序詞とか、掛詞とかは、外在的な技法ではなく。二層構造（表現世界）の磁場をより鮮やかに顕示する、あるいは更に多層的に、更に立体的にカオス化する、重要なアイテムです。そのメタ記号の秘密を解読する知的遊戯に比したら、己を頼んだ私一己の述懐の歌など、いかに痩せて見える事でしょうか。

小松英雄さんが、歴代の歌人たちが【心】を【ことば】に変換する仕組みを工夫して、抒情詩の表現を深めてきた過程を、仮名の形成と仮名文・仮名表記の発達の考察を通して、【和歌表現の複線構造】と指摘されているのも、別の謂いではないように思われます。

源氏物語の、私たちが魅了して已まぬ重層的な表現世界、ことに物語の展開と切り離せぬ【自然】がどう扱われているかというキーポイントも、こうした「和歌表現の複線構造」と無縁ではないでしょう。

もう一点は、三谷邦明さんが、『源氏物語驛糸』で、E・M・フォスターの『小説とは何か』を下敷きに、竹取・伊勢のような初期物語と源氏物語の差異を、ストーリーの物語とプロットの物語の違い、すなわち初期物語は『AそれからB……』と話しの筋書きをそれからそれからと紡ぎ出してゆく and の文学』であるのに対し、源氏物語は、『BになったのはAがあったからだ』と叙述し、因果を明らかにするのがプロットで、whyと

『文学』だと言われていることだ。

更に、why という論理は、できごとそのものでなく、できごとの意味を問いかける。文学においてできごとの意味というのは主題のことである。つまり主題を追求するがゆえに、源氏物語は why という叙述方式を採用したのだ。ところで、このように why という疑問や想像をよびおこしながらつむぎだされてゆく文学は、必然的に、and の文学と異なり、時間が重層化される。虚構内の自然史的で直線的な時間は解体され、あらたに叙述の時間が産出される……と、続けています。

【王朝和歌の本質は、謎と答であるという説】と考え合わせると、源氏物語の表現の秘密の一端が覗いているように思うのですが、如何でしょうか。

【参考】 馴染みある百人一首の歌から……

あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

柿本人麻呂

花の色はうつりにけりないたづらにわが身よにふるながめせしまに

小野小町

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆるに乱れそめにしわれならなくに

河原左大臣

たち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かばいま帰り来む

中納言行平

難波瀉みじかき芦のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

伊勢

わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はんとぞ思ふ

元良親王

名にしおはば逢坂山のさねかづら人にしられでくるよしもがな

三条右大臣

由良のとを渡る舟人かぢをたえ行くへも知らぬ恋の道かな

曾禰好忠

かくとだにえやはいぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを

藤原実方朝臣

大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立

小式部内侍

うかりける人を初瀬の山おろしよはげしかれとは祈らぬものを

源俊頼朝臣

長からむ心も知らず黒髪の乱れて今朝はものをこそ思へ

待賢門院堀河

難波江の芦のかりねのひとよゆゑみをつくしてや恋ひわたるべき

皇嘉門院別当

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ

権中納言定家

第二章 「ものまぎれ」——王権論ほどのくらい有効か

第三章 表現としての「物の怪」

ホレイショーよ、この天地のあいだには、われわれの
哲学の思ひもよらぬことがたくさんあるものだ。

——ハムレット

いきなり吃驚させて申し訳ありません。西郷信綱さんの『源氏物語の「ものけ」について』という高名な論文の扉です。源氏物語を読んで「物の怪」について考えを巡らさないとは、殆どあり得ないことです。わたしも常にこの問題が頭にあつて、考えて見るのですが、その都度、「分かりません」と、つぶやくことになります。ふざけて言うのではないのですが、こんな章を立てて何かを論じようとしていること自体、物の怪の仕業のような気がします。

例えば、『平安朝精神史の基本を仏教におく』ことに、別に異存はない。けれども、悪くするとそれは生活の実体をかすめた浅い観念史、理念史に終ってしまう恐れがある。つまりメダルの裏側が不当に無視されるからで、特に文学史の場合は、その両面を統一的にとらえようとしなにかぎり、話は一向具体的になつてこないだろう。個人の心に浄土教の世界観が成立し発展しようとしていた反面では、紛れもなく神話的世界像や集団的紐帯の解体が余儀なくされつつあつたし、民族史の経験したこの烈しい転換と矛盾のもたらす渾沌や緊張が、平安時代の精神史を領してたのではないかと考えられる。没落してゆく古代貴族と古代都市の政治上の、あるいは経済上の不安が、ここにふかくこだましているのはいうまでもなからう。だが精神の地層は、たんにその時代だけからは直接的にはとらえがたい重層性をもつ。古い神話的世界が大きく崩れてゆき、その諸破片がデ―モンとなつて流動化しつつ人間のまわりをとりまいた状況を仏教との関係のなかで具体的につかまねばならない。浄土教への志向もこの渾沌からのがれようとするものであ

り、その対抗関係にこそ時代固有の問題はあったのだと思う。……………源氏物語の主人公光源氏の死は、古代的・神話的世界の終焉を象徴するとみていい。そして光源氏にまつわる影として措定された六条御息所の「もののけ」も古代のタソガレ時にこそ活躍したのであった。』（西郷信綱）という社会思想的アプローチを左手に……………

『和辻哲郎は、「平安貴族（女性を含めて）は地上生活のはかなさを知ってはいる、しかしそこから充たされざる感情によって追い立てられ、哲学的に深く思索してゆくのではない。彼らには一切の体験において、「反省と沈潜が欠けている。」と指摘する。しかし私の考えでは、紫式部にはこの「反省」があったのである。紫式部は藤原氏の摂関政治によつて観念の世界に追いやられた他の貴族や女性たちが生きた「もののあはれ」の世界を、完璧なまでに源氏物語という作品を通して表現して見せた。そして美しい調和の世界と人々が思い込んでいる源氏「もののあはれ」の世界は、女を鬼となすことによつてはじめて成立している世界であるがゆえに、それを余すところなく完璧に表現してみれば、その「もののあはれ」の世界は、心の中に追いやられた女の鬼心によつて崩壊するということを示したのである。……………はじめて日本の歴史の中で、女がその情念に根ざして鬼になったのだと思う。待っても待っても来ない男、女を男の権力欲の道具とし、快楽の道具とし、心の世界だけに閉じこめてしまった男。藤原摂関政治の繁栄の中で、そんな男を待っただけの存在にされてしまった女が、その深い激しい羞恥と自尊心のゆえに、鬼と化したのである。六条御息所の物の怪は紫式部が源氏的世界に對置させた「反省」なのである。』（赤羽根龍夫）なるヘーゲリアン国文学者の「心の鬼」論を右手に……………

そう言えば、折口信夫先生は「ものは靈魂を意味し、けは胸のけ脚のけなど言ふ様に、病氣を意味するから、もののけとは「靈魂の病氣」と言ふ事である。しかし、後にはものけと言へば、鬼であり、或は精霊である」とおっしゃってたな、などと思ひ出しながら、遊離魂や集团的無意識、御霊信仰などを援用して考えてみても、外堀は埋まってもゆく感もしますが、どうもすつきり得心いった例（ためし）はありません。

では搦め手からという訳ではないのですが、サイデンステッカー訳「源氏物語」に対する、イギリスの小説家V・S・プリチエットの書評の一部をご紹介します。葵巻で、六条御息所の生霊があらわれる場面についてです。

『この侮辱はひどいものである。これ以降、嫉妬の悪霊は魔性の実在物となる。葵は妊娠してゐるし、臨月だし、瀕死の状態である。悪霊は彼女にはいりこみ、理性を奪われた源氏が語りかけたとき、彼女は六条の貴夫人の声で答へる。六条の貴夫人は自制力を失ひ、自分の声を瀕死の女に投げ入れたのだ。これは悪霊にとり憑かれた一例で、このような場面はロマンスではありふれたものだが、しかしじつに巧みなので、われわれは信じてしまふし、そして怯える。荒々しい感情は伝わり、潜在意識の発散として認識される。といふのは、六条の貴夫人は、この行為を意識的に欲したのではなかったけれど、それにもかかわらず悔恨を覚えるからである。このせいで彼女は、宮廷の有力者としての生活

をつづける意欲を失い、自分にとり憑いてゐる魔的なものを捨てるため、尼僧院にはいる。もしこの場面がロマンスの声高な流儀で書かれてゐたら、童話のように非現実的なものになってゐたらう。しかしこの筆づかひは抑制がきいてゐるので、われわれを愕然とさせる。』(丸谷才一訳。太字みかみ)

わたしは、今回の講演概要に、『そのノート(紫式部の創作ノート)には「物の怪についての文化記号学」なんて項目もあつたかも。何故なら、物の怪を物語展開の枢要な要素として扱いつつながら、現代の読者が読んでも、ギリギリのところまで荒唐無稽と感じないように書いている。この節度も考えて見ればまことに異様であり、周到なことです。』と書きました。プリチェットの書評が頭にあつたわけではありません。しかし、物の怪の問題を物語の表現の問題と捉えていること、表現の魔法にかけられたように、物の怪の出現を荒唐無稽とは感じていない事。(無論この物語がロマンスでも、おとぎ話でもないことをはつきり認識した上です。)ほぼ同様な感じ方をしているように思います。六条御息所は、生霊として源氏に影のように寄り添い、後には死霊として殊に紫上の運命に大きな関わりを持ちますが、その段階に至っても、少なくともわたしは、大変素直な気持ちで、その死霊の声に耳を澄ますことが出来ます。プリチェットが【抑制のきいた筆づかひ】と言ひ、わたしが【異様なほど周到な節度】と感じているものが、では何なのかと改めて問われれば、殆ど形のある返答は不可能であるような類のものなのですが。

第二部の表題を「物語表現の諸相」としたのも、単に本稿の課題、論点を限定する意図ではなく、源氏物語には、どうしても解けぬ難問が色々仕組まれていて、それに対して巧みな、頭のいい解釈は幾らでも思いつかれそうだし、その努力をわれわれは怠つてはならないが、でも、何かが常に取り落とされてしまう。そうした永遠の深淵が口を開けている。そして、もし行き詰まったら、表現の姿に立ち返って考えて見るしかない。素直な気持ちで物語から聞こえて来る声に聴き入れればいいのではないか………と、という心持がどこかにあるからです。そう言えば、『意は似せ易く、姿は似せ難し』と言つたのは宣長さんでした。

第四章 物語の閉じ方

① 遅延、白紙、突然の中断———叙述の時間について

前の章で、「葵巻」での六条御息所の生霊出現の場を取り上げました。

「葵巻」は光君二十二歳の凡そ一年ほどの期間が扱われています。『世の中変りて後……

……』と起筆されているところから、直前の「花宴巻」で朧月夜の君との交渉が語られた後、空白の二十、二十一歳の間に、桐壺帝退位、朱雀帝即位、冷泉院立坊の事があつたことが分かります。光君は大将に昇進しています。……前坊の姫君、つまり六条御息所の娘（後に源氏の手駒として、冷泉帝の中宮となる）が伊勢の齋宮になることが決まります。新帝即位に伴ってです。この時点での源氏の正妻格、葵上は懐妊しています。賀茂の齋院も交代する約束で、新齋院の御禊の日、その行列を見物に出た、葵上と御息所の間で有名な「車争い」が起こります。左大臣の娘葵上の威勢に、わけもなく自尊心を傷つけられた御息所は、それでなくとも源氏との間が疎遠になりがちだったので、事件を契機として、お産に苦しむ葵上の産屋に物の怪として現われるまで、自らの鬼心を増幅させるのです。この生霊出現の語りの巧みさを前項で取り上げたのでした。

再び話が戻ってきたのには、理由があります。実は御息所の生霊にとり殺されるかと思われた葵上は、何とか危機を乗り切り、無事に源氏の長男（夕霧）を出産します。物の怪調伏に詰めていた、高僧たちも役目を果たし引き揚げます。源氏はもとより、左大臣家の人々もホッとして、静かな日常にもどるのです。お世辞にも仲の良い夫婦とは言えなかった二人の間には、父となり母となった若者の自然な語りも戻るかに見えます。……ところが産後の葵上は、皆が安心しきり、男君たちが宮中に参内している隙に、あっけなく落命してしまいます。蜂の巣を突いたような騒ぎになります。

こうして粗筋を語り始めたなら、際限ありませんね。わたしは今、故意に、「and………」
「それから………それから………」のように書いてみました。
先ほど三谷邦明さんの『源氏物語躰系』に触れたとき「whyの文学」と比べて考えて見ましたね。

もし、紫式部が単なる「ストーリーの文学」「andの文学」しか念頭に置いていないのだしたら、恐らくこんな間意こしい、面倒な筋書きにはしなかったはずで、御息所の生霊と源氏の切迫した遣り取りの直後、夕霧を産み落とすのと引き換えに、葵上を殺していたでしょう。

「whyという疑問や想像をよびおこしながらつむぎだされてゆく文学は、必然的に、andの文学と異なり、時間が重層化される。虚構内の自然的で直線的な時間は解体され、あらたに叙述の時間が産出される」とあつたのを思い出してください。わたしはこの場面の「時間のずらし」を「遅延」と呼ぶことにしています。「遅延」は近代小説の有力なテクニックです。紫式部はこの「語りの時間の引き伸ばし」が余程気に入っていて、大事な場面になると、伝家の宝刀のように、計算づくで、物語の時間を操作して見せるのです。今から、千年前でしょう。どうしてこんな技法に思い当たったか、巧いなあとか言いようありません。

遅延と同じような、高度な語り口は幾つも見つかります。それらは紫式部単独作者説

の有力な論拠にあげられそうなほど、个性的かつ、超時代的だと思います。

「白紙」とわたしが呼ぶことにしているのもその一つです。源氏物語前篇（第一部・第二部）の最後は「幻巻」。直前の「御法巻」で紫上が亡くなり、独りぼっちになってしまった源氏の寂しい姿が、その運命を暗示されつつ語られます。そして後編の最初の「匂宮巻」巻頭で『光かくれ給ひし後……………』とあることで、その間に源氏が亡くなったことが分かるのです。

大事なことを一切説明しないのは、さっきの「葵巻」巻頭も同じですね。あれは生前讓位、政権交代でしたが、今度は主人公光源氏の死そのものですから、意味合いが違います。あんなに「光君が……大將が……大殿が……」と言っていたのに、その死そのものは、読者の想像に委ねられています。昔から「幻巻」と「匂宮巻」の間に、「雲隠」なる巻があったのだという説があり、その巻は白紙になっていたと考えられていました。いかにも紫式部がやりそうな仕掛けですね。真偽は分かりませんが、そう考えてみるのも面白いと思います。

実は「白紙」で大事なものは、ある事件の発端が意図的に「白紙」にされている場合です。最も重要なのは、物語の核心たる「ものまぎれ」、光と藤壺の母子密通⇨王権への侵犯の、そもそもの発端が一切記述されていない、白紙になっていることです。古来、これを欠巻の可能性として考える向きも多かったのです。中には自分でその最初の交情の場面を、創作して見せた御仁もおります。「桐壺巻」で一人は「光る君」「かゞやく日の宮」と並び称されているので、「かゞやく日の宮」という巻が失われ、そこにもものまぎれの発端が書いてあったと考える人もいます。わたしはもともと、白紙だったと考えます。紫式部は大体事実をあらかじめ書かぬ作家ですが、それゆえと言うよりは、創作上の効果をはっきり意識してそうしているように考えられます。事柄が微妙なので、このあとは口頭で私見を述べます。……………この手の気の持たせ方は玉蔓の運命についても言えます。この点も併せて説明いたします。

以上は準備で、実はこの三世代80年になんなんとする物語の閉じ方、「突然の中断、時間停止」とでも言いたい、まことに異様な結末部について、最後に触れたい。それは「宇治十帖」について考えることと同じなので、それを以て今日の話をまとめたいと思うからです。

「遅延」「白紙」と同じように、「中断」も近代小説を説明するアイテムの一つです。考えて見ればみな時間に関わっていて、紫式部は叙述の時間をとことん考え抜いた人だと思えます。源氏物語の本当の主役は、時間そのものであるとよく評されるのも、そのことを指しているのかも知れません。以下のような観点を私は好みませんが、千年前の事です。世界的にも、稀有な作家であるといえるのではないのでしょうか。

次節以下、この結末部を原文と、幾つかの訳を比べながら検討し、この【続きなき中

【断】がどんな意味を持つのか、「宇治十帖」の概略を説明しながら、考えてみましょう。

② 宇治は彼岸性の喩足り得ているか？

亡き光源氏と女三宮の子、薫は自らの出生の秘密をぼんやりと聞き知り、悩み多き貴公子として、当時宇治に隠者のように落魄し、信仰の道に入ろうとしていた、八の宮（かつて光源氏の反対勢力に担がれる立場であった人物）と交渉を持ちます。お互いの道心を確かめ合うように、若い薫は宇治に通いますが、そこには大君、中君、美しい姉妹がひっそり父と暮らしていて、薫は大君に強く惹かれます。そこに、源氏の娘、明石の中宮の三男、匂宮（源氏の孫に当る）が絡み、四人の入り組んだ関係の果て、薫が愛した大君は父宮の後を追うように亡くなり、中君は匂宮の京の邸宅に引き取られます。この複雑な三角関係の重なり合いのなかで、薫は彼岸性を体現する貴公子として、匂宮は現世的なエピキュリアンとして、やや類型化され、対照的に描かれています。光源氏の全能が、時代が下り、精神と肉体に別れたのだという風に、図式化して捉えられてきたのは無理ない一面があります。大君を失った薫は図らずも二人の姫君の異母妹浮舟に出遭い、大君に似ていることもあって深く愛しますが、また匂宮が横からちよっかいを出し、新たな三角関係が生じます。精神性を感じさせるが、優柔不断な薫のウジウジした愛と、ひたすらに肉体的快楽を追い求める匂宮の激しい愛に引き裂かれ、浮舟は入水自殺を図るまで追い込まれ、挙句、源信がモデルとも言われる横川の僧都一行に助けられ、小野の里で出家をします。やがてそれは薫の知るところとなり、薫が浮舟の弟に手紙を託けるものの、突き返されて帰ってくる。その時の薫の、何とも軽薄な呟きで、この五十四帖、長い長い物語は終わります。

今回何人かの友人が、初めて源氏物語を通読してくれました。わたしは皆に同じ質問をぶつけてみました。

『通読されて、「宇治十帖」ひとまとまりに考へ、どんな印象抱かれましたか？ 八の宮の道心と薫のいびつな性格、「宇治」てふ地名が喚起する彼岸性から、正編を書き終えた後、紫式部に「厭離穢土」「欣求浄土」の思ひが深まったことが執筆動機であろうとする、最もポピュラーな観方、どう思われますか？ 「浮舟物語」は本当に魂の救済の物語なんだろうか？ 大雑把な印象を聞かせてください。』

「宇治十帖」について、大雑把な印象と感想を書きます。最初に読んだ印象としては、「救いがたい、どうしようもなさ」という印象を持ちました。物語全体に対しても、登場人物である大君にも、出家した浮舟にも、勿論、浮舟に拒絶される薫にも救われない印象を持ちました。魂の救済の物語とは、僕には思えませんし、作者紫式部に「厭離穢土」

「欣求浄土」の思いが深まったとも思えません。作者紫式部についていえば、最後まで「年くれてわが世ふけゆく風の音にこころのなかのすさまじきかな」「いづくとも身をやるかたの知られねば憂しとみつもながらふるかな」（紫式部日記より）の歌にあるように、沈鬱な内省心を抱きながら、あくまで現世に生きながら現世に絶望する自己を虚構の世界に転位して生き抜く覚悟をもった強靱な精神の在り方を感じます。時代の風俗として仏教があり、欣求浄土を行っている人々が住む宇治という場所を設定し、現世を厭離し、仏道に志の深い人物として薫中将を設底し、現世否定的な思いをこめたものとして意図したとしてもです。

……………中略

横川の僧都と妹の尼君に助けられた浮舟は、もはや他界に生まれ変わったようにもとの記憶を失い、すべての帰属感を無くしています。おぼろげに蘇る記憶はあるようですが、信仰を信じているわけでもないし、生きながら死んでいる、はかない、表情のない存在となっているのではないのでしょうか。浮舟をそうさせたのは、表面的には手児奈伝説の説話の様に、来世的（精神的）な薫の愛と現世的（肉体的）な匂宮の愛に引き裂かれたことですが、どうも一番の原因は薫中将にあるのではないのでしょうか。

薫中将の思っている愛の理想は、大君のところでもそうですが、相手の心を尊重し、自然と相手の心も自分の方に向かうようになるまでは、無理には気持ちだけの関係を壊すことはしないという、肉体的な交渉のない態度をとることが理想の恋愛関係であるというものだと思います。だから、大君でも浮舟でも、現世の憂きことどもを語り合い、相互の悲しみを慰め合うことが大切で、勿論相手を傷つけることなどはしないようにする。（ということとは自分も傷つかないということだと思いますが）いわば、薫中将は遠くから紳士として関係を壊さずに、自分が傷つくことをしないで見守る存在です。どうもそこがおかしくもあり、救いようがないと僕には思えます。これでは誰に対しても関係としての愛は成立しないのではないのでしょうか。

大君が衰弱し死に至るのも、浮舟が自殺に追いやられるのも、そのおおもとにある原因は、薫中将が自身のエロスを抑圧しており、女性たちに放ち得ないからではないですか。そこが、どうしようもなく、救いがないと僕が感じた内容です。

でも、人間の狭さや矮小さや、どうにもならない暗部や、心の奥底にこもる苦悶はどうしようもないとも思います。それを見続け、描き切ったのが紫式部であり、文学の在り方であるとも思っています。（太字 みかみ）

眼から鱗……………ひとつの「宇治十帖論」と思います。

わたしの問い掛けからして、多分わたしがぼんやり感じていたことを、大変明確にかたちにしていただきました。

講演概要に、『最後に所謂「宇治十帖」と呼ばれる、光君亡き、子や孫の世代の新しい物語が始まります。この段階で、物語は「神」の世界を完全に脱し、人間の世界を正面から描くことに集中してきます。超人光君の不在ゆえでなく、作者の内的表現欲求がそ

ここまで到達したと思わせる充実です。』と書きましたが、多分紫式部はこの段階で、末法の世を目前にしなから、「厭離穢土」「欣求浄土」の思ひを深くして、続編を書こうとしたのではなく、出家を含む救済の思想をすら相対化し、「生きなずみ、たゆたう」魂の孤独、寂しさだけを真直ぐ見詰めていたのではないのでしょうか。

八の宮や宇治なるトボス、薫と匂宮の書き分け、浮舟の運命から、この物語には隠者の手が加わっているのではないかとも考えられてきました。折口先生もそのような見通しを持っておられたと承知しています。亀井勝一郎さんは、【虚無を抱きしめた絶望の深さ】を直視した作家の精神の新しさに注目しながら、それは後の「隠者文学」に繋がっていく系譜と考えられていたようです。しかし繰り返しますが、浮舟物語は、登場人物が類型化され、その総体の関係性が現世厭離を指し示す来世志向の物語でなく、薫も、匂宮も、大君・中君も、勿論浮舟も、このままで、わたしたちの周り何処にでも居る、生身の人間なのであり、決して本当にはお互いを理解し合うに至らない、人間が抱え込まざるを得ない絶対的な孤独、寂寥、絶望を見据え、その先に何があるか、魂の救済などではなく、凡夫の自覚だけなのではないか……それを描き切っていると感じます。己の心の「たゆたい」を神仏（外在的観念）に回収するようなことは、絶対にすまい。強い作家の意志を感じます。

何ら劇的なこともない、拍子抜けのような、（ある意味では光君にも濃厚にあった）一人の男のまことにいい気な、軽薄な呟きで長い物語がプツンと閉じられているのは、やはりこれっきゃない結末だと思うのです。わたしたちはいずれこの世と別れます。しかし、世の中はそれにもかかわらず、わたしの死とは無関係に続いてゆくのです。『寂しいものよね』と、そう誰かが言っているのですね、きっと。

源氏物語はテキスト（織物）として、常に新しく編み込まれていかねばなりません。ただし、それは恣意的であっていいと言ふことにはなりませんし、そもそも時代的課題から自由になれるはずもないのです。2018年の時点で、宇治十帖の読みがある方位を示していることに感慨を覚えます。

③ 凡夫の発見——法然と式子内親王 および定家のこと

短く結論だけ申します。凡夫の自覚の系譜ははどこに繋がってゆくのか。言うまでもなく、法然であり親鸞であり、一遍でしょう。隠者ではありません。紫式部の事を考えていると、わたしは反射的に式子内親王を思い浮かべるのですが、「面影人は法然」という「式子内親王伝」を読んだことがあります。内親王といえは、能の「定家葛」を思い出すまでもなく、定家とも切っても切れぬ縁。飛び抜けて優れた女流歌人です。「内親

王と法然」にも哀しい伝説があるようです。

結語 作家は成熟する

沈鬱な内省心を抱きながら、あくまで現世に生きながら現世に絶望する自己を虚構の世界に転位して生き抜く覚悟をもった強靱な精神。……紫式部は源氏物語を書くことによって、刻々成熟を遂げていった作家だとおもいます。でも、それは安寧に至る道ではありませんでした。最後の巻は「夢浮橋」と名付けられています。定家の

春の夜の夢のうきはしとだえして嶺に別るるよこぐものそら

を、塚本邦雄さんが、『ここには事実などかけらもない。虚で始まり虚で終るいはばいはりの世界である。そして真とは、その虚妄の中にひらく華の謂いであることを、定家は證したにすぎない。事実と真は別の事である。』と評しています。

定家を紫式部と読み替え、もって結語として「源氏物語」に捧げたいと思います。